

学会ニュース

目次

・ 代表幹事就任にあたって (武田 将明)	1
・ 代表幹事退任にあたって (王寺 賢太)	2
・ 学会費納入のお願い (飯田 賢穂)	3
・ SMOOSY導入のご案内	4
・ 第47回大会について (大石 和欣)	5
・ 第48回大会について (大塚 雄太)	6
・ 2024-2025年度 国際18世紀学会 (ISECS) 執行委員会報告 (玉田 敦子)	6
・ 余白、それとも・・・ (原田 範行)	8
・ 第47回大会を振り返って (井上 櫻子)	9
・ 『日本18世紀学会年報』第40号の公開遅延および再公開に関しまして (武田 将明)	10
・ 事務局より	10

代表幹事就任にあたって

武田 将明

2025年6月29日に慶應義塾大学で開催された第47回大会総会において、王寺賢太前代表幹事の後任として承認されました。私は研究者としてのキャリアの初期から、日本18世紀学会のお世話になってきました。まだ大学院の修士課程に属していたとき、最初の学会発表を行ったのは、日本18世紀学会の年次大会でした。いま思えば随分と無理のある拙い発表に対し、真摯な学問的視点からいくつものご質問をいただいたことで、その後の留学と博士論文執筆に向けて、大いなる励みとなったことを覚えています。

もしも同じ発表を、他の学会でやっていたら、あれほど温かく迎えられなかったかも知れません。このときから現在に至るまで、日本18世紀学会はあらゆる人びとに広く門戸を開き、温かく受け入れることを特徴としてきたように思われます。

本学会のウェブサイトにあるように、「日本18世紀学会は、18世紀という時代を対象に、洋の東西を問わず、文学、芸術、思想、歴史、政治、経済、科学などさまざまな切り口から研究する領域横断的な学術団体」です。つまりここには、18世紀の文化・社会に関心があるという1点において、様々な年齢や専門の方々が集まり、互いの属性を括弧に入れて自由に意見を交換する気風が根づいています。これから2年間、代表幹事として、この本学会特有の風通しのよさを大切に、すべての会員、およびこれから会員になりうる方々にとって、日本18世紀学会が居心地のよい場所となるように務めたいと思っています。

およそ半世紀にわたり、こうした伝統を保ってきた本学会ですが、人文社会系の学問をめぐる日本の、いや世界の状況の変化に対応し、近年は様々な制度上の改革を実行してきました。二代前の逸見

龍生元代表幹事の時代には、より多くの学生や、常勤職を持たない研究者に参加していただくため、A会員とB会員の二種が設けられ、また本学会がすべての会員にとって安心できる場所であるように、「ハラスメント防止宣言」および「ハラスメント防止ガイドライン」が制定されました。さらに、王寺前代表幹事の時代には、本学会の各種規程の抜本的な改定、会員名簿の整備、SMOOSYというオンラインシステムを導入した学会費の支払い手続き等の簡便化に加え、本学会の研究活動を広く世に周知すべく、『日本18世紀学会年報』のオンライン化も遂行されました。これらの改革に関わった学会事務局・幹事会の方々に、心から感謝申し上げます。

私としては、こうした一連の改革が定着するために、できる限りのことをする所存です。年報のオンライン化に関しては、本ニューズレターの別文書でご説明したように、いくつかの手違いによって公開が大幅に遅延してしまいました。申し訳ございません。今後は例年どおり6月の年次大会の前に公開できるよう、編集委員会と事務局で連携を取っていきます。加えて、過去の年報についても、オンラインで閲覧できるように順次アップロードいたします。また、ハラスメント対策についてもさらに検討を続けて参ります。

すでにお気づきとは思いますが、A会員とB会員の設定、オンラインシステムの導入、ハラスメント防止、年報のオンライン化のいずれも、18世紀の文化・社会に関心を持つすべての人に門戸を開放するという、本学会の本来のあり方から外れるものではなく、むしろ現在の技術も取り入れつつ、それをさらに推進していくための改革です。つまり、18世紀学会の根底にあるものは、およそ30年前の私が不安と矜持を胸に年次大会の場に臨んだときから変わっていません。学会運営に関して、ご意見やご不明点があれば、どのような些細なことでも事務局にお尋ねください。また、お近くに18世紀の文化・社会に関心のある方がいれば、年齢や所属に関係なく、ぜひ本学会のことをお伝えください。

日本18世紀学会は大規模な学会ではありませんが、多様性においては他のどの学会と比べても遜色ありません。今後も会員のお一人お一人と手を携えながら、地に足のついた学会運営をしていこうと存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

代表幹事退任にあたって

王寺 賢太

2025年6月29日の第47回大会総会で、2年間の代表幹事の任期を満了し、退任しました。2年前の代表幹事就任にあたって、私は「このままでは学会の存続はおぼつかない」という強い危機感を持っていました。会員数の漸減、過去7年間の会員名簿発行の停止、前年度の会費徴収の半減など、学会の運営体制に関わる問題が山積していたからです。その上、2022年には、『年報』掲載の書評記事をめぐって学会が論争の組織と会員への対処に関して責任を問われる件が発生し、私は幹事会で組織された検証チームの責任者として問題の收拾に当たっていたという経緯もありました。この学会の危機に際して、私には、これまでさまざまな18世紀研究者との出会いのきっかけと多くの学問的刺激をいただいていた当学会に対して、長年幹事を務めながら十分な貢献をしてこなかったことに対する自責の念もありました。代表幹事在任中、『年報』掲載の書評記事をめぐる問題の対処にあたりとともに、さまざまな学会運営体制の見直しを実行してきたのは、そのような背景があつてのことでした。

学会の運営体制の見直しに関しては、前幹事会で決定された学会事務局機能の一部外部委託（SMOOSY導入）を実行することが、代表幹事として直面した最初で最大の課題でした。これに付随して、A会員・B会員の種別を含む会員名簿の見直しを行い、会員名簿を毎年春に更新・公開する体制も整えました。一連の大きな運営体制の変更を実現することができたのは、ひとえに小関武史さん（移行担当）、飯田賢穂さん（会計担当）、川村文重さん（名簿・選挙管理担当）、金沢文緒さん（広報担当）、斉藤渉さん（事務局長）の分掌体制で再編された事務局メンバーの方々のご尽力の賜物で

す。また年報編集委員会と大会開催担当幹事に関しては、それぞれ事務局に対する独立性を高めながら、『年報』と年次大会を充実させる仕事に取り組んでいただきました。さらに『学会ニュース』と『年報』については、支出の抑制と学会活動の公開性の向上のため、順次オンライン化を進めました。以上一連の学会の運営体制の変更は、最終的に、先の大会総会でご承認いただいた、会則及び役員選出の細則の改定にも反映されています。

矢継ぎ早のさまざまな変更にあたっては、会員みなさんにも大いにご迷惑をかけ、大いにご協力をお願いすることになりました。そのおかげで、会費徴収率は著しく回復し、学会の財政状況も好転の兆しを見せています。けれども私にとってそれ以上に喜ばしかったのは、2024年の大阪大学での第46回大会、2025年の慶應義塾大学での第47回大会と、いずれも12名の会員からの自由論題の発表をいただき、実に充実した大会を開催できたことです。それぞれの大会で学会企画として開催した、当学会の創設者の一人である故・水田洋さんの仕事を振り返るシンポジウムと、当学会で3期にわたって代表幹事を務められた小田部胤久さんの18世紀ドイツ美学についてのご講演も、学会の越し方と行く末をつなぐための貴重な機会だったと思います。この大会の充実と軌を一にして、今年度からオンライン化されることになった『年報』も、掲載される論文数が年々増加しています。ただし『年報』に関しては、前事務局の不手際もあって、公開が例年の6月から大幅に遅れる事態を招いたことを、会員みなさんにあらためてお詫びしておかなくてはなりません。

学会の本義に立ち返り、年次大会と『年報』を充実させることは、私が代表幹事就任にあたって定めた大目標でしたから、大会開催と『年報』刊行のたびに、多くの会員の積極的な参加を得ているのを見て、私はささやかな幸福感を覚え、「こんなふうに学会が楽しい学問的交流の場である限り、まだまだ18世紀学会はもつはず」と思われていました。過去2年間、多大なお力添えをいただいた事務局・幹事会のメンバーと、会員みなさんに心から感謝しています。

日本18世紀学会は、さまざまな学問分野の、さまざまな世代の研究者たちが、「18世紀研究」への学術的関心のみによって集まり、議論する場です。この学会ならではの学問的な視野の広さと自由闊達な気風も、大学内のディシプリンの垣根を超えた同好の研究者の集まりというわれわれの集団の性格からくると思います。しかしまた、そうであるだけに、この小さな学会の基盤は常に脆いものでもある。この学会を支えるのはつまるところ、この学会を構成するそれぞれの会員とその学問への情熱でしかないからです。年々厳しさを増す大学内の人文学研究を取り巻く環境に抗して、日本18世紀学会が末長く、会員みなさんの情熱によって支えられ、会員みなさんに学問の楽しさを伝える場であり続けることを心から祈っています。私自身、今後は一会員として、そのための努力をもうしばらく続けるつもりです。

学会費納入のお願い

飯田 賢徳

本学会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までです。学会の活動は、会員の皆さまからの年会費によって支えられています。過年度分の年会費が未納の方は、SMOOSYのマイページからお支払いをお願いいたします。未払い分がある場合には、後日学会からもご請求のご連絡を差し上げます。

2025年度分の会費納入につきましても、12月中にあらためてご案内申し上げますが、未納の方は、恐れ入りますが、お早めにご対応いただきますようお願い申し上げます。

SMOOSY利用方法と年会費納入方法について、以下あらためてご案内します。

SMOOSY導入のご案内

当学会では、学会運営を簡素化・効率化し、学会を長期的に維持するため、2023年度から、株式会社アトラスが提供する会員管理システムSMOOSYを導入しております。

会員の皆様には各自「会員マイページ」が割り当てられており、各自の操作によって、以下の一連の操作が可能です。

- ・会員登録情報の閲覧、変更
- ・会費納付状況の照会
- ・会費のオンライン決済手続き（銀行バンクチェック決済）
- ・会費の請求書、領収書PDFのダウンロード
- ・学会からのお知らせ閲覧

また、学会からの連絡や会費納入の督促もSMOOSYを通じて一括して行うこととなります。以下では、①会員マイページにログインし、登録情報を更新する方法、および②オンライン上で年会費の支払いを行う方法を再掲します。

①【会員マイページ ログイン方法】

- (1) 会員マイページの「初めてログインする方はこちら」をクリックし、会員情報として登録しているメールアドレス（※）を入力して「送信」ボタンをクリックします。
- (2) 「パスワード設定URLのお知らせ」メールが届くので、メール文内のパスワード設定URLをクリックします。
- (3) パスワードを入力し「登録」ボタンをクリックします。
- (4) 「会員マイページ」ボタンをクリックして会員マイページを表示します。
- (5) 画面一番下の「会員情報を変更する」ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※登録されているメールアドレスは、当学会から会員の皆様にお送りしているメールの受信アドレスとなります。メールが届いていない方は事務局（jsecs18@gmail.com）までご連絡ください。

また、操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の「ヘルプ」をご参照ください。さらに、一部の項目については、会員による変更ができません。会員種別、氏名、生年月日、入会日（不明者は1800年に設定）等です。これらについて変更を希望される方は、事務局までお知らせください。なお、賛助会員の方はマイページがご使用になれません。内容のご照会は引き続き事務局までお願いいたします。

②【年会費の支払い方法】

- (1) まず会員マイページにログインしてください（①参照）。
- (2) 画面上で「請求名称・入金状況」を確認してください。「未入金」と表示される年度の会費の納入をお願いします。
- (3) SMOOSYでの決済は、SMOOSYを運営する株式会社アトラスを通じて、株式会社ROBOT PAYMENT（ロボットペイメント）の決済代行サービス（バンクチェック）を利用しています（※）。
- (4) 「請求/入金情報」欄の画面右側「操作」枠の「支払う」をクリックし、
- (5) 明細を確認の上、「お支払いに進む」をクリックしてください。
- (6) 受付画面（ROBOT PAYMENTシステム）で電話番号と振込人名義を入力します（SMOOSY上で電話番号が登録されている場合は、あらかじめ表示された電話番号のままで結構です）。振込人名義欄にはSMOOSYに登録されている氏名のカナ表記が表示されていますが、お持ちの口座の名義と異なる場合は口座の名義と一致するよう変更してください。一致しないとROBOT PAYMENTシステム上で入金を確認できません。

(7) 「入力確認」画面で入力事項を確認の上、「次に進む」をクリックし、「決済申し込み完了」画面で「決済申し込み」をクリックします。

(8) ここで、いったん会員マイページに戻ります。「請求/入金情報」欄の右側に、あらたに「振込先口座情報」のボタンが現れるので、クリックしてください。

(9) 振込先口座番号の情報が現れます。以下はその一例です。各会員の振込毎に、「りそな銀行アース支店」の「ロボットペイメントシュウノウダイコウ」名義の個別の振込先口座番号が指定される設定となっています。この口座番号は一請求につき一つずつ割り当てられるもので、同一会員であっても年度ごとに異なります。複数年度の会費が未納の方は、お手数ですがそれぞれの請求に対応した口座に入金してください。

例)

0010.りそな銀行	936.アース支店	普通.76****3.カ)ロボツペイメント シュウノウダイコウ
------------	-----------	---------------------------------

(10) 受付メールが届きます。振込先口座番号はメールにも記載されています。

(11) 指定された振込先口座番号への入金、従来のゆうちょ銀行口座への入金方法とまったく同じです。会員各自がオンライン決済なり、銀行での振込なりによって実行してください。

(12) ROBOT PAYMENTで入金確認され次第、SMOOSYからメールで銀行振込の確認のメールが届きます（数時間、ないし土日を含む場合は数日かかる場合があります）。なお、学会事務局にはROBOT PAYMENTから入金確認後、その都度通知が入ります。

(13) 同時に、SMOOSYの会員マイページ上で「請求/入金情報」欄の該当年度の右端に「領収書を発行する」のボタンが現れます。

(14) 請求書を発行する場合は、「請求/入金情報」欄の画面右側「操作」枠の「請求書を発行する」からダウンロードしてください。

(15) 領収書を発行する場合は、お支払い後、「請求/入金情報」欄の「入金済を含む全ての請求を表示する」をクリックし、「請求一覧」画面右側「操作」枠の「領収書を発行する」からダウンロードしてください。

※年会費の支払いは、事務局の負担の軽減のため、できるだけROBOT PAYMENTを介した入金をお願いします（一請求一口座の効果で、誰がどの年度の会費を払ったかが自動的に記録されます）。従来通り、学会のゆうちょ銀行口座への直接振込を希望される方は、学会事務局まで申し出てください。

学会運営の効率化と維持のため、以上、①登録情報の確認と②年会費の納入につき、会員各位のお力添えをお願いいたします。

以上、ご不明な点があれば、日本18世紀学会事務局（jsecs18@gmail.com）までお問い合わせください。

第47回大会について

大石 和欣

日本18世紀学会第47回大会は、2025年6月28日（土）・29日（日）に慶應義塾大学三田キャンパスで開催されました。自由論題は12本の発表が行われ、活発な質疑応答が交わられました。共通論題は原田範行会員をコーディネーターに、「余白が語る18世紀」をテーマとして実施されました。また、学会企画として小田部胤久会員による講演「18世紀の申し子／鬼子としての美学」が行われました。さらに、レクチャーコンサートでは石井明氏を講師にお迎えし、「バロック後期の器楽作品に見られる混合趣味」が披露されました。大会の開催にあたりご尽力くださった関係各位に厚く御礼申し上げます。

第48回大会について

大塚 雄太

次回（第48回）の日本18世紀学会大会は、2026年6月27日（土）・28日（日）に関西学院大学（西宮上ヶ原キャンパス）で開催いたします。開催校担当は関西学院大学文学部の久保昭博会員です。自由論題の発表希望者は、2026年2月末日までに以下の公募要領にしたがってご応募ください。

【自由論題発表公募要領】

第48回大会の「自由論題」で研究発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をワードファイルで作成・添付の上、2026年2月末日までに、大会実行委員会までメールでお申し込みください。

応募先メールアドレスは以下の通りです（事務局アドレスとは異なりますので、ご注意ください）。

jsecs.congress@gmail.com

採否は幹事会で審査し、大会実行委員から追ってお知らせいたします。

発表は一件につき50分、うち研究発表に40分、質疑応答に10分の予定ですが、申込者多数の場合は、個々の発表時間を短縮するなど、調整させていただくことがあります。あらかじめ御了承下さい。

大会で自由論題発表を行った会員は、当該年度の締め切りおよび次年度の締め切りの二回まで、『日本18世紀学会年報』に「大会発表論文」の投稿が可能です。

なお、非会員も当学会に入会した時点から、自由論題発表への応募の権利が生じます（入会申請は随時受付と承認を行なっています）。ぜひこの機会にご入会ください。学会HPから入会申請フォームにアクセスできます。

多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

2024-2025年度 国際18世紀学会（ISECS）執行委員会報告

玉田 敦子

国際18世紀学会は、世界各国の18世紀研究者による国際的学術ネットワークであり、毎年、加盟学会代表による執行委員会が開催される。2024年度はアイルランド・メヌース大学にて、2025年度はスペイン・サラゴサ大学にて会合が開かれた。本報告は、その両年度における主要議題と決定事項をまとめるものである。

メヌース大学での会議は、かつてカトリックの修道院として築かれた建物を母体とする、緑豊かで静謐なキャンパスにて開かれた。古い石造の回廊を風が渡り、樹々のあいだから射す光が、校舎の壁をやわらかく照らし、厳粛さと温かさが共存する空間であった。

一方、サラゴサ大学での会議では、2027年に予定される世界大会の会場が午前中に公開された。歴史ある街並みの中心に位置する大学は、荘厳な外観と現代的な設備とを兼ね備え、美しく調和している。サラゴサの市街地もまた、こぢんまりとした風情のなかに中世から近代にいたる様々な建造物が点在し、夕暮れには石畳の街路にカフェやバルの灯がともる。物価も手ごろで、食卓や屋上に並ぶ郷土料理はどれも滋味に富み、散策しながら味わう一皿一皿が研究者たちの心をやわらげた。サラゴサは街全体がまさに、国際学会の理想的な舞台である。

I. 2024年メヌース会議（7月26日）

(1) 財務報告

2023-24年度の総収入は26,608.43ユーロ、総支出は21,266.51ユーロであった。匿名寄付10,000ユーロおよびスイス学会からの700ユーロの寄付により、安定した財政運営が維持された。ウクライナ研究

者への特別助成10,420ユーロを含む支出があったが、全体として収支は均衡している。フランス当局への申請により、寄付金に対する税控除証明書（CERFA）の発行資格を取得する手続きが進行中であり、今後の寄付制度整備に向けた基盤が整いつつある。

(2) 会員・加盟学会の現況

ISECS加盟学会の登録会員数は5,953名に達し、20を超える学会が年次報告を提出した。新たにポルトガルで学会設立が準備されており、今後の加盟が見込まれる。ISECSロゴの意匠も改訂され、握手を象徴するモチーフのデザインが採用された。

(3) 若手研究者支援方針

ISECSの最優先課題として若手研究者の支援を位置づける方針が再確認された。今後の国際大会では、登録料に10~20ユーロの運営費を上乗せし、その収益を若手研究者の旅費助成に充てる提案が全会一致で可決された。

(4) 新たな作業部会とパリ国際会議企画

「ヴァーチャル会議作業部会」および「デジタル・ヒューマニティーズ作業部会」の設立が承認された。DHのWGには日本学会から飯田賢穂会員、小風綾乃会員にご参加をいただく。あわせて、2026年6月10~12日にパリ・ドイツ歴史研究所で開催予定の小規模国際会議「*Enlightenment Contested Again*」が正式に採択された。この会議は、啓蒙概念の現代的意義を再検討するもので、ダニエル・フルダ会長らが運営を担う。

II. 2025年サラゴサ会議（7月10日）

(1) 財務・運営報告

2025年度の財務報告では、寄付5,000ユーロを含む黒字（約6,210ユーロ見込み）が示された。中長期的な財政基盤の強化を目的とし、財務戦略を検討する作業部会の設置が決定された。若手支援予算は維持され、加盟学会に対して名簿更新と会費納付の整合性が求められた。

(2) 若手研究者セミナー（ECR）

2025年7月7~11日、リヨン高等師範学校にてECRセミナーが開催された。14か国から51件の応募があり、9か国21名（男女比ほぼ同数）が採択された。次回は2026年トリアー大学で「アフロ・ユーラシアにおける宗教・道徳・社会の改革」をテーマに開催される予定である。また、2027年にはサラゴサまたはスペイン国内の他大学が予定されている。例年、若手研究者の参加費用については、国際学会が負担することになっているため、日本学会の若手会員の皆様にも奮ってご参加をいただきたい。

(3) EDI方針策定

公平性・多様性・包摂（EDI）の理念をISECS全体で推進するため、隠岐さや香会員（国際学会副事務局長）を中心としてワーキンググループが設立された。今後、ISECS公式文書に反映される方針文書の策定が進められ、次年度の会合で承認が予定されている。

(4) ISECSアーカイブと60周年記念論集

ISECSの公式アーカイブがジュネーヴのヴォルテール博物館（Institut et Musée Voltaire）に正式設置され、創設以来の記録が整理されている。あわせて、創立60周年記念論集『*Internationalizing the Enlightenment: The First Sixty Years of ISECS*』の刊行準備が進められており、2027年サラゴサ大会に合わせた公刊が目指されている。日本学会では小田部胤久会員にご執筆をいただいた。

(5) ローマ大会（2023年）基調報告パネル「Global Antiquity Plenary」の論文刊行

ローマ大会の基調報告パネルにて渡辺浩会員が筆頭著者となり、隠岐さや香会員、玉田が共著となった講演「The Making of Antiquity : Japanese Experience in the Seventeenth and Eighteenth Centuries」がイタリア学会（フィレンツェ大学出版）より2025年6月に刊行された。（<https://doi.org/10.36253/ds-15460>）

(6) 今後の大会予定：サラゴサ大会

次回の大会は2027年7月11日（日）から17日（土）にかけて、スペイン・サラゴサ大学にて開催さ

れる。テーマは「Enlightenment and Equality」である。また2031年大会はブルガリア・ソフィア大学での開催が正式に決定した。なお、執行委員会では、4年に1回、対面で開催される大会とは別に、2年ごとにオンライン大会を開催する案が検討され、正式に承認された。

(7) 国際学会役員選挙

同大会に合わせて実施される国際学会執行委員選挙において、隠岐さや香会員（現・国際学会副事務局長）が副会長候補として、また玉田が選出委員（elected member）の候補として推挙された。役員を選出は国際学会における日本学会のプレゼンスを高める契機となるため、皆様奮って投票をいただきたい。

III. 総括

ISECSはこの二年間を通じて、若手研究者支援の強化、財務基盤の再構築、デジタル化とEDI方針の推進、そして学会史の体系化を進めてきた。2026年パリ会議および2027年サラゴサ大会を経て、18世紀研究をめぐる国際的協働の新しい段階が開かれつつある。

余白、それとも・・・

原田 範行

研究仲間の発表を聴く、学術的交流を深める、思わぬ魅力的な研究テーマを探しに行く、時には自ら発表して広く意見を求める、場合によっては書店展示の中に最新の出版動向を探る——。こうしたことが、一般的には、学会の大会に出席する理由であり、私たちが取る行動パターンであろう。開催校として大会開催に尽力するという事は、もちろん名誉なことであり、ねぎらいの言葉を一つ二つ掛けていただくだけでもやりがいのあることではあるのだが、会場となる教室の予約から始まって、その準備をし、暑ければ冷房を調節し、配布資料が足りなければ印刷に走る、という作業は、やはり、大会の主たる意義に対する裏方の感は否めない。2025年度の日本18世紀学会全国大会は、慶應義塾大学（三田キャンパス）で開催された。私の本務校である。井上櫻子先生といっしょにこの大会をホストすることになり、裏方の仕事のほとんどは井上先生が担ってくださって深く感謝するばかりなのだが、それでも、アルバイトの学生が風邪をひいたと聞けば代役を探したり、猛暑だったので発表者の脇で冷房調節に汗を流したりと、私もそれなりに裏方の仕事に携わる機会を得た。学会の大会を裏から見る、ということは、それはそれで面白い体験でもあった。

ところが今回の大会で私には、こうした裏方の仕事に加えてもう一つ大きな役目があった。大会における共通論題のテーマを設定し、登壇者を誘って意義のあるシンポジウムを作り上げる、ということである。テーマは「余白が語る18世紀」。余白とは本来、主たる内容や本文があるからこそ生じるはずのものである。「余白」にせよ「マージン」にせよ、そもそもこれらの言葉には静的な意味合いが強い。それが marginalize、あるいはmarginalizationという動きを伴った語に変容してくるのは19世紀に入ってからのこと。英語ではジェルミー・ベンサムあたりが先駆けのようだ。いかにも裏方的なこの余白を、開催校の仕事としては裏方に徹して表に出ることを控えつつも、他方で、大会プログラムの重要な一角として表に出して躍動させること——私は今回の18世紀学会大会で、常にこうした裏と表、従と主、マイナーとメジャーの間を往還していたように思う。裏方としての「面白い体験」は、この意味において、実は非常に貴重な体験でもあった、ということになる。

幸い、共通論題においてこの余白は、大いに躍動することになった。登壇者の方々がいずれも、余白に注目することの意義を十分に理解し、それを存分に活用することで、まさに余白が語りだしてくれたからである。歴史記述の余白あるいはヒューマンイズムの余白としての動物を存分に論じた貝原先生、公共圏と親密圏の中間領域としての友情や、その余白としての女性の友情に注目した西尾先生、

反実仮想という鮮烈な視点からデイヴィッド・ヒュームの思想形成の真実を照射してみせた若澤先生、『徒然草』や『伊勢物語』の18世紀におけるパロディから古典の生命力をまさに体現して見せた佐藤先生——登壇者四氏には、お礼の言葉もない。四氏の導きで語りだした余白は、それこそどまるどころを知らず、*marginalize*や*marginalization* などという動詞的含意をもはるかに越えて、18世紀文化の主流へ、いな、主流と傍流が共有する本質的な部分へと迫っていくことになった。

四氏と私は、共通論題のシンポジウム終了後も、場所を移して語り続けた。そこへ、裏方の学生アルバイトの面々も加わったので、私はここでも裏と表、従と主の不思議な往還を体感することになった。それが、愉楽に満ちた、まことをもって至福の時間であったことは言うまでもない。

第47回大会を振り返って

井上 櫻子

2025年6月28日（土）、29日（日）の2日間、日本18世紀学会第47回大会が慶應義塾大学三田キャンパスで開催された。梅雨の時期にもかかわらず、両日とも晴天に恵まれ、全プログラムが予定通り実施された。さまざまな先生がたの助力を仰ぎつつ、無事に大会を終えられてほっとしたというのがまず率直な感想である。

会場となる教室の準備を進めつつ、自由論題についてはどのくらい申し込みがあるのだろうかと半分心配、半分楽しみな気持ちで様子を窺っていた。残念ながら1件キャンセルがあったものの最終的に12件の研究発表を聞く機会に恵まれ、会場には第1日目の午前中から多くの聴衆が集まった。いずれも熱のこもった報告であったが、特筆すべきは海外からの発表申し込みがあったことであろう。また、受付を担当して驚いたのは、非会員の大会参加者が大変多かったことだ。これは、学会幹事会・事務局メンバーの先生方による粘り強い広報活動の賜物だと思われた。

今回の大会では、前代表幹事の王寺賢太先生のご提案で、日本学士院会員小田部胤久先生に「18世紀の申し子／鬼子としての美学」と題する特別講演をいただいた。大阪大学で開催された第46回大会での学会企画は、水田洋先生の追悼シンポジウムという社会思想関連のものであったから、第47回大会では人文科学系（美学）の企画をプログラムに組み込むことができ、18世紀研究の広がりが示されたのではないと思う。レクチャーコンサートは、17・18世紀の西洋音楽学をご専門とする慶應義塾大学経済学部教授石井明先生にお引き受けいただいた。蒸し暑い時期である上に、会場となった西校舎ホールは大ホールで、ピリオド楽器の演奏にはあまり適さない条件であったにもかかわらず、5時間近くにおよぶ入念なりハーサルを経て開催されたレクチャーコンサート「バロック後期の器楽作品に見られる混合趣味」は、実に聴きごたえがあった。筆者としては、石井先生のレクチャーを通して、ヘンデルの音楽が「混合趣味」の上に成り立つからこそ、時代や国境を超えて多くの人々に愛されるのだと発見できたのが嬉しかった。なお、石井先生は日吉キャンパスの藤原洋記念ホールで、学生、塾員の皆さんとともに定期的にバロック音楽のコンサートを開催されていることも付記しておきたい。共通論題「余白が語る18世紀」については、コーディネーターの原田範行先生による報告をお読みいただきたいが、登壇者の指導を受けている慶應義塾大学の学部生が何名か聴講に訪れていたのが微笑ましかった。

筆者は、第47回大会の開催をお引き受けした後に、慶應義塾大学からの転出が決まり、共同で大会の準備を進めていただいていた原田範行先生には多大なご迷惑をおかけしてしまった。この場を借りてお詫び申し上げたい。ただ、筆者にとっては慶應義塾での最後の仕事となった大会運営を原田先生と一緒に進めることができたのは、大変心強く、そしてありがたかった。また2日間アルバイトのお仕事を引き受けてくださり、暑い中、三田キャンパス内外を奔走して学会の運営をサポートして下さった慶應義塾大学文学部英米文学専攻の学生の皆さんにも、心から感謝申し上げたい。

『日本18世紀学会年報』第40号の公開遅延および再公開に関しまして

日本18世紀学会代表幹事 武田 将明

平素より大変お世話になっております。『日本18世紀学会年報』第40号は、本学会として初めてJ-Stage上でウェブ冊子として公開されることが、2024年6月23日に大阪大学で開催された第46回大会総会にて決議され、そのための準備が進められてきました。

しかし、J-Stageへの登録をめぐる手続き上の都合により、第40号の公開が2025年8月以降となってしまったことは、本ニューズレターの前号（2025年5月発行）にて、王寺賢太前代表幹事からお知らせがあったとおりです。本件につきまして、改めてお詫び申し上げます。

その後、J-Stageでの手続きが終わり、『年報』第40号は8月26日にアップロードされました。ところが、すぐにJ-Stageから連絡があり、本誌のウェブ上での巻号表記に誤りがあるため修正の必要があること、巻号表記の修正はJ-Stage側で1ヶ月以上かけて実施すること、そしてこの期間は本誌の公開が停止されることが伝達されました。

巻号表記の誤記は、本学会からアップロードを依頼した業者のミスが原因でした。その後、J-Stage側の修正、事務局による修正箇所の確認、追加の修正への業者による対応を経て、10月24日-25日に再公開のご案内を執筆者にお送りし、10月27日には会員各位にも再公開についてお伝えいたしました。現在、目次に見つかった誤記の修正を行っていますが、本文はJ-Stage上ですべて閲覧できる状態になっております。

上述の経緯により、結果的に、当初の予定より四ヶ月も遅れての公開となってしまったこと、このために、第40号への寄稿者の皆様を初め、日本18世紀学会会員各位に多くのご迷惑をおかけしてしまったことにつきまして、学会事務局を代表して心よりお詫び申し上げます。

今回の遅延を反省し、来年度以降は、例年通り6月中（年次大会の前）に『年報』の最新号を公開できるように致します。

なお、『年報』第40号は、12本の論文、17件の書評・展覧会評を含む、大変充実した内容となっております。J-Stageのサイトからどなたでも閲覧できますので、ぜひご一読ください。ウェブでの公開という新しい挑戦により、日本における18世紀研究がさらに裾野を広げ、領域横断的・学際的な交流が進展することを願っております。

今後とも日本18世紀学会および『年報』をよろしくお願ひ申し上げます。

末筆ながら、日々寒さを増しておりますが、会員各位におかれましては、どうぞご自愛ください。



事務局より

幹事会・総会について

『学会ニュース』第104号の刊行以降、幹事会が以下の日程で開催されました。

2025年6月28日（土） 2025年度第1回・第2回幹事会

2025年6月29日（日） 2025年度総会

『学会ニュース』のオンライン化について

『学会ニュース』は、第103号からオンライン形式での発行に完全移行し、会員の皆様へのお届け方法は、メールを通じて事務局のGoogle Driveのリンクから各自でダウンロードしていただく形となりました。なお、学会ウェブサイト上にはこれまでと同様、個人情報を削除した抜粋版を掲載してい

ます。メールを介した送付となっていますので、メールアドレスの登録がお済みでない方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報ください。

会員名簿の公開について

2016年度以降しばらく発行を停止していましたが、会員同士の研究交流の活発化を図るため、2024年度から会員名簿の定期的な提供を再開しました。2025年度の会員名簿の閲覧方法につきましては、2025年5月16日に当学会からお送りしたメールをご確認ください。名簿に掲載する個人情報は最小限にとどめ、①氏名、②所属先、③メールアドレス（公開・非公開は選択可）、④現在の研究課題のみとしています。2026年度も5月に会員名簿の更新を行う予定です。ご所属等のご変更があった場合は、マイページから速やかな情報の更新をお願いいたします。

『年報』への論文投稿について

大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できます。詳しくは年報または学会ウェブサイト記載の投稿規程をご覧ください。

投書欄について

この『学会ニュース』に投書をしていただくこともできます。事務局までお申込み下さい。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

年次大会における共通論題（シンポジウム）のテーマにつきまして、会員の皆様からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事までご一報ください。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

また、『年報』の書評対象図書についても、書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。

『学会ニュース』のエッセー

会員によるエッセーの掲載を増やし、『年報』と並行して『学会ニュース』を会員同士の研究交流の場として活用していく方針となり、第105号には2025年に開催された第47回大会を振り返って、大会関係者の会員の皆様にご寄稿いただきました。研究紹介、海外滞在記等、テーマは自由で、1200字程度のエッセーを随時受け付けていきます。会員の皆様からの積極的なご寄稿をお待ちしております。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。

寄付のお願い

寄付をご希望の方は事務局までご一報ください。こちらから振込方法についてお知らせいたします。

献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・犬塚元・壽里竜・池田和央訳『ヒューム イングランド史Ⅰ』（名古屋大学出版会、2025年11月）
- ・犬塚元・壽里竜・池田和央訳『ヒューム イングランド史Ⅱ』（名古屋大学出版会、2025年11月）

新入会員募集

日本18世紀学会では、新規会員を募集しています。入会希望者は学会ウェブサイトの [入会案内] からいつでも入会申請が可能であり、幹事会では随時入会承認を行っています。非会員も入会した時点から大会の自由論題発表への応募の権利が生じます。会員の皆様も、ぜひ18世紀研究に関心のある方を当学会にご勧誘ください。

幹事会メンバー（50音順）：飯田賢穂（事務局）、井上櫻子（事務局）、上村剛（事務局）、王寺賢太（事務局、ハラスメント対策委員）、大石和欣（年報編集委員）、大塚雄太（大会実行委員長）、隠岐さや香（国際学会副事務局長、ハラスメント対策委員）、金沢文緒（事務局長）、川村文重（事務局、ハラスメント相談担当委員長）、桑原俊介（年報編集委員、ハラスメント相談担当委員）、菅原百合絵（事務局、ハラスメント相談担当委員）、武田将明（代表幹事、ハラスメント対策委員長）、玉田敦子（国際学会派遣委員）、永見瑞木（年報編集委員長、ハラスメント対策委員）、吉田耕太郎（大会実行委員）

幹事会以外の委員（50音順）：出羽尚（年報編集委員）、佐藤空（ハラスメント相談担当委員）、船岡美穂子（ハラスメント対策委員）、増田都希（年報編集委員）

会計監査（50音順）：貝原伴寛、増田都希

日本18世紀学会ニュース 第105号 2025年11月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 武田将明

事務局 〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-33

岩手大学教育学部美術教育科 金沢文緒研究室 日本18世紀学会事務局

e-mail: jsecs18@gmail.com

<https://jsecs.smoosy.atlas.jp/ja>